

能登半島地震で集団避難している中学生の学習支援に派遣された本校の小林教諭(英語)の活動報告が、南日本新聞に掲載されましたので紹介します。

中学生100人集団避難先へ派遣

声かけ通し学習支える

「授業も衣食住もすべて同じ場です」という環境の中、受験を控えた生徒たちは焦りや不安を感じていたのではないかと。薩摩中央高校の英語教諭、小林伸一さん(48)は5～9日、能登半島地震で集団避難している中学生の支援に当たるため、石川県の宿泊研修施設で活動した。親元を離れ、異例の共同生活を送る生徒たちを学習面で支えた。

薩摩中央高・小林教諭

能登半島地震と 鹿兒島

文部科学省の要請を受け、鹿兒島県教育委員会が派遣。小林教諭は神奈川県で育ったが、両親は福島県の中通り出身だ。幼い頃から親しんだ地が大きな被害を受けた東日本大震災では、現地での活動がかなわなかった。「その時の



小林伸一教諭

心残りがある」と手を挙げた。石川県白山市にある県立白山青年の家では、車で3時間ほど離れた輪島市から中学3年生約100人が2次避難し、共同生活しながら授業を受けていた。自宅から制服を持ち出せなかったのか、私服の子もいた。石川県教委によると、大きな被害があった輪島市の教委が、生徒たちが学べる環境を確保するよう県に依頼。1月後半から希望者が集団避難している。施設では平日午前9時から午後3時半ごろまで、昼食を



集団避難先で授業を受ける輪島市の中学生たち＝石川県白山市の白山青年の家(小林伸一教諭提供)

「生徒の必死さ感じた」

一部を代わりに担ったりした。気になったのは生徒と先生の様子だ。クラスは進路に依じて二つに分かれており、片方は100人以上が入る研修室で授業を受けていた。席は決まっておらず、先生の声を聞き逃すまいと前方へ座ろうとする生徒の姿から、必死な思いを感じた。輪島の先生たちは生徒の変化を見逃さないよう、よく声をかけていた。一方で「子どもたちがいない所では疲れた表情を見せる人がいた。自身も被災したり、慣れない環境で過ごしたりする中で気が張っているのでは」とおもひかかる。派遣を終えた今、被災した生徒たちが高校という次のステージに無事たどり着けるよう願っている。勤務校のあるさつま町では1997年、県北西部地震があった。「災害はどこでも起こり得ること。学校で勉強できる幸せを感じて過ごしてほしい」。石川での体験は鹿兒島の生徒たちと共有していく。(藤本わかな)